



## 決定的瞬間

羽田 恭子

決定的瞬間、これはピュリッツアー賞に輝く、ベトナム戦禍の報道写真に与えられた言葉ではない。われとわが目で確かめた決定的瞬間である。したがって証拠写真はなに。どうせ鳥に狂ったのだから、狂いついでに写真もやらなければだめだ。と、いった方があるが観察と写真は両立しない。写すことに夢中になれば、観察はおろそかになる、などといえればカッコよいが、決してそんな高尚な考えからではなく、写真は、ただめんどうなだけである。ぼんやり見ているほうが楽しいというのが本音である。

ところで決定的瞬間は、クマ夫とゲラ子  
のそれである。札幌市中央区藻岩山、標高  
五三〇メートルばかりの山である。天然記  
念物・藻岩原始林であるが、周囲はすっか  
り宅地化され、北側は確かに原始林の名に  
恥じないが、南側はスキー場や観光道路、  
植林されたところで原始林ではない。南側  
の光景を「大掃除のときタタミをひっくり  
返したような」と、表現した方がいたが、  
雪景色のとき見る南側は、まさにそのと  
り、全くいい得て妙である。そんな山に天  
然記念物のクマゲラが生息している。クマ  
ゲラも、大雪山系の樹海の中にいてこそ神  
秘の鳥であろうが、夜毎、ススキノ赤い  
灯、青い灯を見おろしているのでは、よほ  
ど息苦しいのではあるまいかと、一二五万  
都市に生息するクマゲラに、歎びともに  
多少の同情も禁じ得ない。

さて五月十七日はクマ夫しか観察されな  
かったが、このクマ夫は、壮年という言葉  
がクマゲラにも適用されるものなら、そう  
いいたい、なかなか立派なクマゲラであ  
る。少々くたびれて、文字どおり尾羽うち  
枯らした(といつては悪いが)そんなクマゲ  
ラもいままでに見たことはあるが、これは  
またなんと立派なクマゲラであろう。七メ  
ートルの距離から見るとクマゲラは、羽毛は  
黒光りして頭上の鮮紅色も朝日に一段と冴  
え、嘴のアイボリーも、目のまわりの金環  
もすばらしく、三点確保で巣穴の傍に止ま  
った姿勢は威厳にみち、  
「ご立派」の一言  
につきる。

翌、十八日五時三十分、巣穴から顔を出  
したのは、早である。昨日は否。これはう  
まいくと……思っていると、五分ほどで  
巣穴から飛び出し、北西に飛び去った。ク  
マゲラに夢中のときには耳にはいらなかつ  
たエゾムシクイ、センダイムシクイ、ヤブ  
サメ、コルリ、キビタキなどの囀りが一斉  
に聞こえ、しばらくはそのコーラスに浸っ  
ていると、コロコロコロとクマゲラの飛び  
鳴きの声次第に近づいてきて、  
否が目の  
前に現われる。続いて早も。二羽は、な  
んとなく落ちつきがなく、近くの木を少し  
ずつ移動したり、追いかけてあつたりして  
いる。われわれが邪魔なのか、そう思っ  
てみると否が、ききなれない声を二声ばか  
り出す。ああやるな(女だてらに言葉は  
悪いが、そのときの実感である)。同行の  
小野寺さんに、「よく見ていなさいよ」と  
声をかける。予感的中して、早が水平の  
枝に止まり、つづいて否がとびのり、交尾  
の瞬間である。スズメなどよりずっと長く  
感じたが、何秒くらいだったのか、まさに  
決定的瞬間である。

〇〇同時に、しかも交尾まで見る幸運に恵  
まれたと喜んでいいる。私も朝、三時半に家  
を出て亭主に冷飯を食べさせただけの価値  
は十分にあつたと、独りニヤニヤ。月給取  
りより、鳥に関心を持ってしまった女房の  
話である。

ついでに、翌十九日朝は早〇同時に見れ  
たが、交尾のオマケはつかなかつたことを  
書き添えておく。 — 五一・五・二六 —  
(札幌市・主婦)

「採集の是非論」への私感

渡部 誠一郎

会誌第十四号「採集の是非論」に関する  
記事が大変興味深く拝見いたしました。  
私も動物や昆虫、植物に関心を持ち、自  
然を愛する人間の一人です。自然保護協会  
の座談会で今回のような意見(採集容認論)  
が多数を占めたことは、ちょっと意外に思  
いました。しかし、私はまったく同感で  
す。とくに野田先生の「採集と観察」記事  
には、全面的に賛成します。

私は、むしろ子供達には採集を奨励した

いくらいに思っています。そうすること  
が、成人してから自然に愛着を覚えること  
の大きな要因になると思うからです。子供  
の時から禁止ばかりを押しつけてしまえ  
ば、成人しても自然に対して全く無関心な  
人間にしかならないと思うのです。

以前、私は「自然保護」第一五〇号に、  
このようなことを書いたことがあります。  
早速、反論を受けました。しかし、自然保  
護運動もあまり極端に振り固まってしま  
うことは、かえって反感を買ひ、危険に思  
うのです。

(東京・公務員)

## 北海道自然保護

### 協会に対して

土屋 秀人

北海道自然保護協会の進展につながるか  
どうか判りませんが、無知ながら僕の協会  
に対しての意見を述べたいと思います。

僕が思う限りにおいて、自然を保護、保  
存するためのには、自然についてすこし  
でも明確に知ることが最も不可欠なことだ  
と思っています。

たとえば、ある種の動物を自然環境にお

いたまま保存するので、その動物の生息場  
所を保護区にした……というだけで、  
その種の動物が保存できるでしょうか？  
やそれではできないと思うのです。それだ  
けのことなら、お金を豊富に持つ人だっ  
てできます。でも、ほんとうに保存するの  
ら、その地域での生息数をはじめに、い  
る調査が必要ですよ。それに第一、その動  
物の生態、習性、行動範囲などが明確にさ  
れていないのでは、保存どころかその反対  
の結果にならないともいい切れません。つ  
まり、どの面においてもその動物について  
よく知ることだと思ふのです。

だから自然保護の原点は、自然を保護す  
る人達みんなが自然に接し、自然のすばら  
しさを知り、自然や動物をよく知ること  
と思ふのです。

その観点で、協会の会員の人達はどの  
しょうか？

会員の人達の中で自然を保護しなくて  
は、と思つていない人はもちろんないで  
しょう。でもその情熱はあつても、自然保護  
は地道な活動ですから、その情熱だけでは  
どうにもならないと思ふのです。

僕の尊敬する人の名をあげて恐縮です  
が、米国のナチュラリスト、ジョン・ミ  
アを知っている人も多くいると思ふ  
ですが、ジョン・ミアは米国ばかりでなく、世界

でも自然保護の父だといわれています。  
僕自身もそう思うのです。ここでジョン・  
ミアのことをあげても長くなりますので  
述べませんが、ただジョン・ミアも自然  
保護の父であつたけれども、それ以上に自  
然人だつたのです。ジョン・ミアは、自  
然について深く勉強しました。実際に山野  
を歩き、素晴らしい自然に接しながらです。  
その自然に接した生活があつたからこそ、  
あれだけすばらしい名文も残し、自然保護  
を訴えつづけられたのだと信じています。

自然保護を口で理屈っぽく訴える学者の  
中に、ほんとうの自然を知らない人が多く  
いると思ふのです。その点、ジョン・ミア  
は放浪生活を送つてはいましたが、素晴らしいと思ふ  
のです。ですから、僕がこの場  
において最も強調したいのは、協会々員の人  
達がすこしでも自然に接し、自然を理解し  
てほしく思ふのです。

ではそのためにはどうするのか。自然保  
護、動植物、そして自然についての知識を  
つけるには、もちろん何回でも実際に山に  
接することです。でもそう山野にばかりも  
行けません。だから、こういうときこそ、  
北海道自然保護協会が活躍しなくてはなら  
ないのです。

まず、自然全般についての良書の紹介、  
そのほか映画会、講演会など、数々の運動

ができるのではないのでしょうか。いままで  
この協会は、名称から見ても北海道だけだ  
つたと思ふのです。それに、実際に行動が少  
なかつたと思うのです。こういう現状では、  
絶対に北海道の自然保護などできるわけは  
ないのではないのでしょうか。

いまの現状を打破することも必要だと思  
ふのです。こういう緩慢な現状で、日本中  
の絶滅に瀕している野生動物たちはどうな  
るのでしょうか。たとえばイリオモテヤマネ  
コ、ツシマヤマネコ、カワウソ、ツシマテ  
ン、ジネゴン、トキ、タンチョウ、コウ  
トリ、オオコウモリ、アホウドリ、白鳥、  
ライチョウ、そのほか僕が知る範囲だけ  
でも、あと何種だつています。それにその動  
物達は、絶滅に瀕しているどころか、もう  
絶滅しているかも知れないのです。いや、  
もうすでにこの日本から絶滅した動植物だ  
つてあるはずですよ。こういう現状を見て、  
そういう緩慢な態度でどうなるのでしょ  
う。それに、北海道においても珍獣、珍鳥  
など数々の動物が人間からの暖かい手をさ  
し伸ばしてくるのを待っているのではな  
いのでしょうか。珍獣だから保護するんじ  
やないのですが、いままでも人間がしてきた  
罪はわれわれがとり消すのがあたりまえだ  
と思ふのです。だから前記した動物のため、  
会費や寄附金で保存区を買うなり、保護し

ている人達のエサ代などいろいろ使い道はあることと思います。そういう活発的な行動が、この協会には欠けていたのではないのでしょうか。

ここで、僕が前述してきました協会に対しての問題提起をあげたいと思います。

まず

一、自然全般、あらゆる自然を知る機会を会員の人達にあてる。

(一)自然物について書かれている良書の紹介。

(二)恒例的に総会や自然に親しむ会講座、探鳥会などを開催する。

(三)実際に動物調査し、それを報告。

二、いままでの現状を打破するとともに新たに実際に行動する方針を出す。

まだ、あげればいくらありますが、あとは、また他の会員の人が問題提起してください。

自然保護なんて、どれだけ活動したからこれだけ成果があったなどというものはなく、今後ともつきることもないんじゃないのでしょうか。ほんの小さな美化運動だつて自然保護ですし、小さな助言だつてそうです。訴えることもそうです。でも何より増して前赴しましたが、ジョン・ミューアのように自然に接し、自然を知ることこそ真の自然保護運動につながると思います。

ここで、こうして僕が述べたことは、いままでも会員の人が思っていた最も普通のことです。でも、こういう最も普通のことを、会員の人は提起しなかったのです。そういう点を反省していただきたい点です。

集団主義がない限り、自然保護も何に付けてもできません。でもその集団主義の中にはだれかがするから僕はただ傍で傍観していよう、という弱点があります。この弱点が、この協会の中で存在していたのではないのでしょうか。

とにかく、現在この世界で、いいえ、日本そして北海道の中で、人間の暖かい手を待つ動物達が数知れずいます。その手をさしのべるのは、誰でもありません。会員一人一人の力の団結によってではないのでしょうか。

ほんの小さなことぐらいなんでもないと、思っていたことが保護にも、また自然破壊にも力を及ぼします。山中にいるときは、ほんの小さなことも大きく見てください。それぐらいしなくては保護はできません。

今後、僕自身も、また会員の人が、みなが団結して北海道のいや世界中の動物、自然のための第一歩を歩みましょう。また入会して短期間なのに、せつきよりの発言をして恐縮ですが、実際にこれが僕の短

期間中に、協会に対して考えていたことです。前記しました問題提起の件、会員の人も、また協会の理事の人達も、一度、考えていただきたく思います。

今後の北海道自然保護協会の前進のための助言になるかどうか判らない下手な文章であります、お許しください。

〔大阪府松原市〕

### 追いたてられる野鳥

小山 政 弘

苫小牧市、早来町、厚真町にわたって広がる現在の勇払原野一帯は、いまから六千年前は海底であったといわれる。それが、およそ三千五百年前に海退が起こり始めるとともに陸地化が進み、かつての部分的に低い海底は点在する大小多数の湖沼となつて残った。

春秋、日本列島を南下北上する許多の渡り鳥が、この勇払一帯を必経ルート的重要な寄留地の一つとして、毎年渡去来しつづけていることは誰もが知るところである。

勇払の沼群が、周辺に生態系としては弱々しい湿原をもち、その外側に灌木を混じった草原が広がり、さらにやや複雑な山林へ

と広がる有様は、野鳥相だけを見ても渡来する種の多さを力強く支持している。

この弱々しくも豊かで広大な勇払原野を世界最大の大規模工業地帯に改造する構想が打ち出されたのは町村道政の時代であった。

昭和四十三年に構想が内定され、翌四十四年には道の方針として決定され、約一万余ヘクタールの用地が一七六億円で先行取得された上に、その買取予算は、道議会ですら承認を求めた形がとられたというから、なぜかひどく性急な進められかただったらしい。

人類の経済活動と、野生鳥獣の生活保障とは、どうしても矛盾する。だが、その関係にありながらも、最大限の保障を考へるときはすでに酪農地帯としての開発が進められていたこの地域を、自然破壊源で、公害発生源でもある工業地帯に再開発すると考へるのは、明らかに常識外れである。

一部の開発論者達が、歴史に大きく傷をつけるほどの甚大な生態系破壊や環境汚染をもととせず、この常識外れの大博奕(ばくち)を打つのも、経済発展を最良とする金儲けに他意ないからであろう。

鉄鋼関係予定C地区にあたる弁天地域の丘には、乗用車で横つづける展望台がある。そこには駐車場もあるし、立派な東屋

もあれば、コンピナート開発構想地図も置かれてある。この「お立ち台」に立って、眼下に広がる離農跡や原野を眺めると、いかにも「不毛の大地」に見えるという話を聞いたことがあった。道すがら車窓からも見えたはずのオオジュリンやノビタキ、シマオジなどの草原を好む小鳥、あるいはオオジシギやチュウビ、ノスリやハイタカ等々の姿は、たとえ目に入っても金にならぬ雑物にはかならないのだろう。

この二年間、私は勇私の鳥の生活を見つめてきた。それは、野鳥観察が好きだからというだけではない。スズメもカラスもトビも要するに、勇私で見られるあらゆる鳥と、その鳥が生活している場の変化を見つめてきたのである。そして、その環境の変化の意味することを仲間達と考えつづけてきた。

本来は、野生鳥獣を保護すべきはずの「鳥獣保護法」は、すでに時代に遅れ、異物化している実状を知ることができた。たとえば、ウトナイで一、二見られる「鳥獣保護区」のプレートよりは、あの途方もなく広大な用地のいたるところに、これ見よがしに立てられている「北海道企業局」の真新しい用地内立入禁止の看板の方がプレートに威力を感じる。あの工業用地こそが、「鳥獣保護区」指定に相応しい地帯な

のだ。二年間の観察から、野生鳥獣保護の立場で、最も信頼できないのがお役所であることを、私は肝に命じた。

急変する時の流れにあつて、ナチュラリストがもう勇私原野における最大の任務は一つにこの地域の変容過程を植物、動物を通して記録し、後世に残すことであろう。たとえささやかな記録であつても、いつの日にか苦東工業開発の愚かさを、そして何も役に立たぬ「鳥獣保護法」があつたことを証明するはずだと信じているのです。

年毎に追いたてられる勇私の野鳥は、一体どうなるのだろうか。

(千歳野鳥の会々員)

### 天塩のヒグマとともに

青井俊樹

早いもので、ここ幌延町にある北大天塩演習林の山奥の飯場をねじろに、クマ追いの生活をはじめて二度目の初夏を迎えようとしている。

一番近い人家まで六キロほどの、通称「森陰のわが家」の生活は、早朝うるさいくらいの小鳥のさえずりににはじまる。ユマ

ドリ、コルリ、エゾムシクイなどの軽やかなさえずりによるめざましは、さわやかなものである。しかし、そのさわやかなめざましにくらべ、日中の、ヒグマを求めての踏査は苛烈をきわめる。

襲いくる吸血昆虫を追い払い、一メートル先も見通せぬほどの猛烈なネマガリダケやチシマアザミ、オオブキ、イラクサのブッシュをかきわけては、ヒグマの足跡を、糞を求める毎日。日本でのクマ類の研究がろくに進まないのは、この環境条件の悪さも一つの要因ではないかと思われる。

雪崩をさげながらにはじまる春の調査から、薄水を踏みしめて終る秋まで、ここでは自然とは、まず何よりもいかに融和し、また時には戦うべきものではないかと感ずる次第である。

しかし、こういうところで生活していると、四季の山々の移り変りの美しさや、身近な種々のものが、折りにふれわれわれをなぐさめてくれる。山菜もその一つである。アイヌネギ、ウド、コゴミ、フキなどはいうまでもなく、日々の食卓をにぎわすものは二〇種を越えよう。

中でもお勧めの一つに、キリ科の高茎草本のヨブスマソウがあげられる。三角形の変った葉をしたこの植物は、東北地方ではポウナと呼ばれて最近とくに人気が出て

来たそうだが、春先の若い茎を油アゲなどと煮びたしにして食べると、まさに絶品である。また、ササの葉で作るササ茶も芳ばしく、ほうじ茶にも負けない味である。

さらにここは、山奥だけあつて、いろいろな動物にもおめにかかれる。

今日も、まだこげ茶の毛をした仔ギツネが一匹、親のあとにチョコチョコついて歩いているのを見かけたが、思わず新見南吉の童話を思い出し、小屋に手袋でも買いにこないかなどと一人考えて楽しくなつてしまった。

しかし、せっかく小屋の前を耕して作った畑を、ちよくちよくギツネが荒しにくるのにはこまつたものだが………。ギツネならまだいいがクマが訪れるようになると、いささか考えてしまふ。もつともそうならば、小屋で寝ころがって直接観察ができ都合がいいかな、となまけ心が顔をもたげたりして――。

いずれにせよ、溶け込み、親しみ、そして時には戦うべき大自然に囲まれて生活できることは、現代の最高のぜいたくの一つなのかも知れぬ。この生活を、日々大切にしなければと思う今日このごろである。

(北大ヒグマ研究グループ・北大農学部大学院生)